



第 15 號
 月 1 回 發 行
 ひの心を繼ぐ會
 〒799-1336
 住所:愛媛縣西條市
 上市甲 720-1

綱 領

- 一 私達は明德を明らかにします
- 一 私達は國家の鎮護となります
- 一 私達は 大和世界を建設します

神道(五) (大和世界の建設)

古事記

北と一

美斗能麻具波比

—河圖・洛書—

竹葉 秀雄

聖人は此日本神道の神理に則つて易を作つて陰陽五行の理を表し示したのである。

「天、一を以て水を生じ、而して地六を以て之を成す。

地、二を以て火を生じ、而して天七を以て之を成す。

天、三を以て木を生じ、而して地八を以て之を成す。

地、四を以て金を生じ、而して天九を以て之を成す。

天、五を以て土を生じ、而して地十を以て之を成す。」

即ち、水は天の陽氣(一)によつて發生して、地の陰氣(六)によつて完成し、火は地の陰氣(二)によつて發生して、天の陽氣(七)によつて完成する。木は天の陽氣(三)によつて發生し、地の陽氣(八)によつて完成し、金は地の陰氣(四)によつて發生し、天の陽氣(九)によつて完成する。土用は土の氣の盛んな時で、立春立夏立秋立冬の前十八日間を言ふ。

五行に相性相剋ありとし、相性は、木生火、火生土、土生金、金生水、水生木。相剋は木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木。とする。が相剋を善く用ゐることが大事で、相生相剋あつて天地は統一され一大活動が行はれてゐるので、禍を轉じて福とするのが易である。物理學にも對生成、對消滅があるのは當然である。

五行は迷信ではない。古事記を眞に讀んでその神言を悟る者は、そこから生じた神理による河圖の五行、洛書の洪範九疇に無限の眞理を汲むであらう。五行の配列を一部あげると。

(圖省略)

數は本來千萬億兆阿僧祇劫と無限であるが、その本源は十數に止まり、(日本古來の、ヒフミヨイムナヤコト、のトは止まるのである。)その十數中、一より五までが純數であり、基本數である。北に始めて一(陽)を生じ、南直ちに相應じて二(陰)を發し(電・磁氣の極の生ずるをもつて明かなり)北に生じた一の陽の冬至水を生じ、左旋して東に三陽と伸びて春となり木を生じて、南に發したる二の陰の夏至火を生じそこから右旋して西に四陰を起して秋となり金を生じ、三と二、四と一、美斗の麻具波比して中央に五土用中和の氣を正して、四正を明かにする。この純數、基本數の五は、古事記の「別天つ神五柱」の玄妙なる作用と理法である。五の數の妙理は後に述べるも、手足の指の各五本及び五體・五常・五行などについて考へられたし。

次に、北の一、中の五と合して六を生じて、北に一と六との奇偶、陰陽相協ひ、南の二、中の五と合して七を生じて、南に二と七との奇偶、陰陽相協ひ、東の三、中の五と合して八を生じて、東に三と八との奇偶、陰陽相協ひ、西の四、中の五と合して九を生じて、西に四と九との奇偶、陰陽相協ひ、中の五、五と合して、中に五と十との奇偶、陰陽相協ひて數の配置を完了し、天地のこと終つて終らず又始まる故に十を復圓の一とするのである。

河圖は四隅を見ざるより圓と云ひ、女の體・心とする。靜的なるもの時間的なるもの靈魂的なるものとす。八卦の源である。

河圖においては、「汝は右より廻り逢へ」は西から北、陰の四は陽の一をとつて五となり、「吾は左より廻り逢はな」は東より南、陽の三が陰の二をとつて五となつて中央に逢つて美斗の麻具波比せられるのである。

第一章 農の哲學的考察

菅原 兵治

第三節 農本生活 第三項 農本的自覺

呂氏春秋の一節

「古先聖王のその民を導く所以のもの、まつ農を務む。民の農なるは、ただ地の利を爲すのみにあらず、その志を貴ぶなり。民農なれば則ち樸、樸なれば則ち用ひ易く、用ひ易ければ則ち邊境安く主位尊し。民農なれば則ち重く、重ければ則ち私義少く、私義少ければ則ち公法立ち力專一なり。民農なれば則ちその産復す。その産復すれば則ち徙るを重んず。徙るを重んずれば則ちその處に死して二慮なし、民本(農)を捨て、末(商工)を事とすれば、則ち令からず。令からずんば則ち以て守るべからず。以て戦むべからず。民本を捨て、末を事とすれば、則ちその産約なり。その産約なれば則ち遷徙を輕んず。遷徙を輕んずれば則ち國家に患あり、皆遠志ありて居心あるなし。民本を捨て、末を事とすれば則ち智を好む。智を好めば則ち詐多し。詐多ければ則ち法令に巧にして是を以て非と爲し、非を以て是と爲す。后稷曰く、耕織を務むる所以のものは以て教を本とするが爲なり。」

勸農詞

「風流をたのしむ花園ならで、後の畑前の田の作物に志ざし、自ら鋤を把りて耕やし、先祖の賜と、命の親に懇を盡し、吉野の櫻、更科の月よりも、己が業こそたのしけれ。朝夕心を留めて打むかふ奈種の花は、井出の山吹よりも好ましく、麥の穂の色は、牡丹芍薬よりも、腹こたへありと覺ゆ。朝顔より夕顔こそよけれ。萩桔梗よりも、芋牛蒡に味あり。渾べて花紅より栗柿は實の木なり。稻の穂竝の賑はしく藁の前より腹滿つる心地して、粟穂に馴る、鶉、野邊の蟲の音聞くが面白く、遠き名所舊蹟より、近き田圃の見廻りが飽かず、松島鹽釜の美景より、飯釜の下が肝要なり。上作の名劍より、鋤鎌は調法なり。書畫の掛物より掛けて見る作物の肥を油斷せず、投入れ立花の工より、茄子大角豆の正風なるが見處多く、茶の湯蹴鞠の遊より、澁茶を飲んでの昔話こそをかしけれ。玉の臺より茅葺の家居が心易く、高きに居らねば落るあぶなげなく、迷はねば悟らず、念佛のかほりに業を怠らず、實義を盡すは神詣でに比し、仁者に習ふて山に木を植ゑ、知者の心を

汲みて田の水加減を専にし、珍肴鮮肉の料理より、錢いらすの雑炊が後腹痛める氣遣なし。總て世の中は、飛鳥の川の流れ、きのふの淵は今日の瀬となるが如し。唐の威陽宮、萬里の長城も終には亡び、平相國の驕りも一世のみ。鎌倉の將軍も三代を過ぎず、北條足利の武威盡き、織田豊臣の榮も終に一代なり。時過ぎ世替れば誠に夢の如し。世に稀なる珍味も舌の上にあるうち、伽羅蘭麝の薫りもかぐうちのみ。樂は苦の基、財寶は後世の障り、遊興はしばしの夢、他の富めるも羨まず、身の貧きも歎かず、唯慎むべきは貪欲、恐るべきは奢なり。抑も田地は萬物の根元にて國家の至寶なれば、父母の如く敬ひ、主君の如く尊み、妻子の如く育しみ、寸地をも捨てず、何處にても歟先の天下泰平、五穀成就を願ふより外更になし。(小林一茶)

と。これを道徳的戒律命令と見れば成る程窮屈にならう。然し之はもつと和かな藝術的比喩である。俳人一茶の詩情によつて詠ひ出された農本生活への行進曲と見るべきである。

以上縷々述べて來たが、之等によつて農本思想、農本生活の根本義が奈邊にあるかが大體ながら把握し得られることと思ふ。

萬葉集觀賞①

三浦 夏南

今月より萬葉集に關しての文章を少しづつ書いて行きたいと思ふ。本號ではまず初めに萬葉集の概略について確認する。

萬葉集といふ題名の意味であるが、大きく分けて「よろづの言の葉を集めた」という意味と「萬世に傳はるべき歌集」との二つの解釋がある。萬葉の「葉」を「言葉」と見るか、「世」と見るかの差である。有名な先哲に於ては、賀茂眞淵翁は「言葉」と言ひ、鹿持雅澄翁は「世」と言つてゐる。筆者としては鹿持翁の「古義」に従つて萬葉集を讀んできたので、「萬世に傳はるべき歌集」と考へたいところである。

萬葉集は古い時代では仁徳天皇様から、新しい時代では淳仁天皇様の御代まで凡そ四百四十年間の歌が集められているが、舒明天皇様以前三百年の歌数は少なく、舒明天皇様以後百年餘りの歌が中心となつてゐる。その百年の中でも時代に區切りがある。初期は飛鳥に都があつた時代で、素朴、純粹な歌が多い。次は藤原の宮の時代。柿本人麻呂や山部赤人の歌が有名である。最後に奈良朝時代。山上憶良や大伴家持が代表歌人として擧げられる。

萬葉集は「記紀・萬葉」と言はれるやうに、古事記、日本書紀と共に我が國の本質を明かにする上で重要な書のひとつとされている。それでは何故斯くまで重要とされているのか。鹿持翁の『古義』を参考としながら考へたいと思ふ。『古義』の總論の内、古學の章冒頭には或る人の問ひとしてこう記してある。應神天皇様の時代に、漢字と共に儒教が傳來し、その後二百五十年ばかりを経て佛教が我が國にも廣まつた。萬葉集の主たる時代である藤原朝や奈良朝の頃には儒佛の精神や外來の風習は我が國に深く浸潤し、抜きがたいものとなつてゐた。さらにその時代には江戸時代の國學者の如く儒佛の精神を鋭く批判し、皇國の尊嚴を説くものもなかつた。其れにも關はず何故この時代の歌を學ぶことが國體を學んで行く上で大事であるのか疑問であるといつた質問である。萬葉集は古代純粹の精神を傳へた歌集であると認識している我々としては、少し豫想外にも感ずる質問であるが、良く考へてみれば確かにさうである。萬葉集の歌は決して神代や上代の古代歌謠集ではなく、儒佛傳來以後、文明開化以後の歌を中心とする歌集なのである。しかし、それに對して鹿持翁は、先ほどの疑問に一應は同意しつつも、それは

どに外來の宗教や風習に流された世の中でありながらも、神事と歌詞には神代そのままでのぶりが正しく傳はり、残されていたことが却つて重要であると説かれる。これは古事記編纂の主旨とも一致するものである。古事記も神代ながらの純粹な時代に作られたものではない。外來思想に汚染され、壬申の變という國內の大亂を経て編纂された神典である。つまり、古事記も萬葉集も迷へる時代に自らの本質を再認識する自覺の書として生まれたのである。これは國體が隱蔽されること著しい現代にこそ記紀・萬葉が必要であることを意味している。もう一つは日本純粹の精神は神事のでぶりと歌詞の言靈により傳へられているということである。理論、教條、制度として傳はつたのではないのである。だからこそ宗教は儒佛が常識となり、政治、制度はシナ化しても、純粹な日本の精神は滅びることがなかったのである。我々は日本精神を祭りや歌を通して體驗的に把握しなければならぬ。萬葉の歌ひぶりに習ひつつ、今に歌を詠む必要がある。これは本居宣長先生が、國學を學ぶ上で歌を詠むことを重要な修行の内に數えていることから分る。これから萬葉集を読んで行く上で、常に自らの詠歌を念頭に置きつつ味はいたいと思ふ。

とよくも農園だより

三浦 美恵

農作業を終へて軽トラで歸宅してみると、水を張つた田んぼの上を清々しい風が走り、ほてつた頬を優しく冷ましてくれます。六月は「水無月」と言ひますが、これは六月になると皆が一齊に田植多をするため、あちこちで水が無くなることからのついた名ださうです。

今月はケールの畑の片付け、春野菜畑の片付け、ハウス建設に向けての準備、里芋の手入れ、夏野菜の收穫、そしてネギの準備と手入れを行いました。

ケールと春野菜は暑さにやられて元気が無くなつてきてゐたため、マルチをはがし、トラクターで耕しました。今までの経験から、何事も早めに手を打たなければ、片付けが大變になることが分かつてゐたので、直ぐに手を入れました。そのお蔭でスムーズに片付けができ、次の野菜を植ゑる準備をすることができました。

續いてハウスですが、今秋にアスパラガスを定植する豫定です。西條市では、今年度アスパラガスのハウスを建てる農家に補助金が出る爲、それにむけて堆肥を入れたり、注文するハウスの資材を確認して見積書を作成したり、資材に塗料を塗つたりしました。

次に里芋ですが、蛾の幼蟲が葉をかじり、氣が付くと何株かやられてゐました。一株一株蟲がゐないか間引きしたり草をひいたりしながら確認しました。里芋は毎日手入れをする必要がない爲、ついでにお話がおろそかになりがちですが、こまめに見て手入れすることが重要だと反省しました。



そして夏野菜の手入れです。ピーマン、ナス、キュウリ、オクラ、トウモロコシ、ズッキーニ、シソ、ツルムラサキ、モロヘイヤが採っても採っても生り、毎日の収穫に大忙しです。今年は去年より肥料を多く入れていたことから収量も多く、その分収穫が大変です。キュウリは枝を剪定していかなかったことが原因で質の悪いキュウリが大量に出来てしまつてみました。そこで近所の人に剪定方法を教えてもらひ、丈夫なツルだけを残すやうにしましたこと、無事採れるやうになりました。採つたばかりの野菜を畑でそのまま頂いたり、数時間後には机に並んだりする生活は農家ならではの贅澤で、このやうにして自給自足の割合を少しづつ増やして行きたいと考えてみます。

最後にネギの準備と手入れです。三浦家の家計の主軸にしようと考えており、二十日に一回、四千株近くのネギを定植してあります。水やりも一仕事となるので、その手間を省けるやう雨の日の前日に急いで定植します。また次のネギの畑の準備も同時に行ひます。堆肥や肥料を入れて耕耘するタイミングはそれぞれの畑の乾き具合によつて違ひ、梅雨になるとそのタイミングも難しくなつてきます。そこで時間のある時にネギの畑を耕耘・畝立て・マルチ張りまでしておきます。今後大規模化して行く予定なので、他のネギ農家さんの畑も見學豫定です。

今年梅雨が七月に来ると言はれてゐるため、来月は天候豫報とにらめっこしながら農作業の計畫を立てることに
なりさうです。想像以上に農業で
生計を立てることが難しく、落ち着
かない生活がしばらく続きますが、
勤皇村形成の礎がしっかりとできる
やう、全力を投入して来月も農業
に勤しみたいと思ひます。



★活動報告

- ・六月四日(火)勉強會『農土道』を開催。
- ・六月十八日(火)勉強會『大學』を開催。

★今後の豫定

- ・七月九日(火)十九時～二十一時『農土道』
松山市男女共同参画推進センター☆コムズ三階會議室 112
(住所:愛媛縣松山市三番町六丁目四二〇)

- ・七月十四日(日) 十時～十三時

- ・第二回定期總會・近藤美佐子先生を語る會
松山市・久保豊二番町ビル三階二番町ホール
(住所:愛媛縣松山市二番町三丁目八一二)

- ・七月二十三日(火)十九時～二十一時『大學』

- 松山市男女共同参画推進センター☆コムズ三階會議室 112
(住所:愛媛縣松山市三番町六丁目四二〇)

★一燈照隔 萬燈照國

ひの心を繼ぐ會は竹葉秀雄・近藤美佐子兩先生の精神を繼承し、發展させることを目的として生まれた會です。一人の「ひ」の精神が周圍の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが國を照らす「ひ」になることを願ひ、活動を行つてをります。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますやう、宜しくお願ひ申し上げます。

年會費

- ・一般會員 三千圓
- ・賛助會員 一萬圓
- ・特別賛助會員 三萬圓
- ・支援會員 一萬圓

